

塩田 弘

このたび、2013年9月より一年間、アイダホ大学にて在外研修の機会をいただきました。ここアイダホ大学のメインキャンパスのあるアイダホ州モスコーは、人口約2万人の小さな町です。住民のうち1万5千人近くがアイダホ大学関係者で、加えて町には小さな私立大学と、12キロ西にはワシントン州立大学のメインキャンパスがあり、まさしく学園都市として学生のために存在しているような町です。大学を囲むように、ダウンタウン、ショッピングモール、ウォルマートがコンパクトにまとまっていて、緑の中を気持ちよく走るサイクリングロードと、定期的に町全体を循環する無料バスがあり、車がなくても不便を感じることはありません。一步郊外に出ると、「パルス」というこの地域独自の風景が続き、大規模な小麦畑が広がっています。私が借りたアパートは、大学にもショッピングモールにも自転車でも五分くらいの場所ですが、緑が多く残っている場所で、『森の生活』の動物たちに囲まれて、幸せな毎日を過ごしています。



アイダホ大学は、ネイチャーライティング研究/エコクリティシズムの草分け的存在であるスコット・スロヴィック教授が昨年より赴任されており、いろいろと親身にお世話いただいています。先生が担当されている大学院の授業は、月曜の夜六時半から九時までの時間に開講され、「Interdisciplinarity」に焦点を当て、文学だけでなく幅広い社会事象を対象とした「学際的」な内容となっています。毎回二冊の課題図書について話し合っていく形式の授業で、15人の大学院生が非常に真剣に取り組んでおり、私の他にも在外研修で二名の方がこの授業に参加しています。授業では、作家がゲストとして参加することもあり、作者自身に本の執筆過程や、作品の意図などを聞くという機会もありました。その際に、私の質問に対しても長く回答いただいた後「次回の作品で取り上げてみたいテーマだ」とおっしゃっていただいたのは、これまでにない体験でした。



ダウンタウンの小さな書店では、アイダホ大学の英文学科後援で、半月に一回の間隔で、新刊本の作者による朗読会やポエトリーリーディングなどが開催されます。その書店は百年前に出来た赤煉瓦の建物で、その一角で三十人くらいしか収容できない小さなフロアが会場です。ここでは、穏やかな時間が流れています。